－所蔵作品紹介－

中臺　瑞真　NAKADAI Zuishin

桐手箱

きりてばこ

作品データはこちら

中臺瑞真（大正元～）は、宮中の調度品を制作したこともある指物師竹内不山の元で修行し、茶器を中心に桑、杉、桐など幅広い素材を使った指物技術を学んだ。後年は刳物の代表作家の一人となるが、その技術については、ほとんど独学で研究したという。

木工芸の技法には、指物、刳物、挽物などいくつかの技法がある。刳物は、木工の技法として基本的なもので、一つの木塊を刳って成形して作品に仕上げるものである。鑿や刀、鉋等を使って手で仕上げるため、同一の形を複数作ることは難しい。反面、自由な曲線や形を作ることが可能で、そのため、作家の感性を直に作品にあらわすことができる。一度に彫り出すのではなく、少しずつ彫り、しばらくねかせて様子をみて、また彫る、という時間をかけ何回もくり返す気の長い仕事である。

中臺瑞真は、刳物の素材として軟木中の軟木である桐材を好んで用いる。桐材は材質が非常に柔らかいので形を大まかに作り出すことは比較的容易である。しかし、表面をきれいに仕上げる段になると非常に技術を要する木材である。硬い木の場合は、表面を研いだり、磨いたりすることができるが、桐の場合は鑿、小刀等で丁寧に削り出し、艶のある平滑な面に仕上げなければならないからである。

この最終的な仕上げは、作品として最も重要な一つであるが、刀の切れ味と高度な技術によって、桐材独特の美しい銀のでた柔らかく清潔な肌に仕上げている。

旭川美術館だより「氷華」No.27（1991.10発行）「収蔵作品から」より